

# 川崎市蟹ヶ谷古墳群の発掘調査

土生田 純 之

## 1. はじめに

蟹ヶ谷古墳群は川崎市高津区蟹ヶ谷に所在する。当初3基の円墳で構成される古墳群であると考えられていた。しかし所在地一帯が神庭特別緑地保全地区（神庭緑地）として公有地となりボランティア団体の「神庭里山を楽しむ会」が管理することになった。このため、それまで藪に覆われていた部分（当初円墳と考えられていた箇所）も、刈り取られて地形が明瞭となっていた。さて2011年の春に東北・北関東大震災が発生し、神奈川県下も無視できない被害をこうむったために、川崎市教育委員会では担当者を市内各所に所在する文化財を巡検させて、被害状況の確認にあたらせた。その際、これまで円墳と考えられてきた部分のうち1箇所については、小規模な前方後円墳ではないかとの疑いがもたれた。

ところで、川崎市内では白山古墳<sup>(1)</sup>などかつて存在していた前方後円墳もすでに消滅しており、現存の前方後円墳はないものと考えられていた。このため、たとえ小規模であっても唯一残存する前方後円墳の存在意義に高いものがあり、当該地の歴史を語る上では無視できない古墳であることが明らかであった。そこで、本墳を含む古墳群の築造時期や史的性格などを明らかにしようという機運が生じたのも当然のことであった。特に蟹ヶ谷古墳群の西北約2kmの位置には橘樹郡衙や郡寺と考えられる影向寺<sup>ようごうじ</sup>が存在しており、これらの創設・創建は7世紀に遡上する可能性が高い。

したがってこれらの官衙や寺院の成立前史を追究するうえにおいても、古墳群の内容を把握することは極めて意義深いことと思われた。そこで、川崎市教育委員会では川崎市市民ミュージアムに調査を託すことにしたが、市内

所在の専修大学文学部考古学研究室、および従来から密接な関係を維持してきた日本大学文理学部考古学研究室にも協力を依頼した。こうして関係機関による協議を実施した結果、今後蟹ヶ谷古墳群にとどまらず多摩川流域の遺跡群を継続的に息長く調査することになり、専修大学文学部教授・土生田純之を団長とする多摩川流域遺跡群研究会を結成して、川崎市と協力して調査にあたることとした。こうした合意に基づき、蟹ヶ谷古墳群の調査は平成 24 年度から 5 か年計画で実施することになった。

なお、本調査団の構成は以下のとおりである。

団 長；土生田純之（専修大学文学部教授）

副 団 長；川崎市市民ミュージアム館長

参 与；濱田晋介（日本大学文理学部教授）

主任調査員；高久健二（専修大学文学部教授）、

山本孝文（日本大学文理学部教授）

## 2. 調査の概要

以下では 1～3 号墳までの各古墳別にその概要を説明する。

### 1 号墳

第 1 年度（平成 24 年度）の平成 24 年度は、墳丘測量調査を実施した。まず古墳群が立地する丘陵上全体を対象とした光波測量を川崎市教育委員会から業者に委託したうえで、各古墳別に実施したより詳細な平板測量図を重ねる方法を用いた。1 号墳については、当初東南側を後円部と考えていたが測量結果から西北側が後円部となることが判明した。測量図によれば全長 27m を測るが、後円部が削平されており本来は 30m 以上あった可能性がある。また、著しく幅狭の墳丘形態を示している。これらの特徴は、いずれも後世の削平によるものである可能性が考えられたため、第 2 年次以降の発掘調査はこの点の解明が焦点の一つとなった。

第 2 年度（平成 25 年度）の発掘は以上の問題点にかんがみ、後円部の外側に 1 ヶ所（第 2 トレンチ）と墳丘南側面の 3 ヶ所にトレンチ（第 9～11 トレンチ）を設定した。これらは墳丘周囲に穿たれた周溝を検出して墳丘規模

を確定する目的で設定したものである。なお、北東側は急な崖となって矢上川に至る。このためトレンチの設定は難しい。おそらく古墳築造当初から、北東側に周溝は掘削されていなかったものと考えてよいであろう。さて、調査の結果、墳丘側面に設定した各トレンチから前方部側面に並行する溝状遺構が検出された。この遺構は周溝である可能性が考えられたが、疑問な点もあって直ちに周溝と断定するには至らなかった。すなわち、いずれのトレンチにおいても幅が狭く（2 m以内）、深さも20～30 cm程度がかろうじて確認されたに過ぎないものであった。おそらく、西に向かって降下しつつも平坦面をなす丘陵上部は相当に削平されたものと思われる。この削平は大規模なものであり、周溝の底部がようやく残存したに過ぎないものと思われた。これに対して後円部外側の第2トレンチにおいて検出された溝は、規模・深さにおいて墳丘側面の遺構とは全く異なって大きな数値を示している。また、墳丘側の落ち込み部に対応する反対側（外側）の上昇部はトレンチ内では確認できなかった。こうした点からみてすでに周溝は削平され、その後さらに深い溝が掘削された可能性が考えられる。なお、各トレンチから埴輪片が少数出土したほか、第2トレンチの底部からは縄文時代早期の土器片（尖底土器の底部）が集石遺構とともに出土し、その直下には地山が認められた。したがって、上述のとおり、ここでは恐らく周溝はすでに完全に削平されたものと思われる。

第3年度（平成26年度）は、前年懸案となった問題点を解決する目的でトレンチを設定した。すなわち第9～11トレンチで確認された溝状遺構との関係、つまりこれらが墳丘を圍繞する周溝である確証を得ること、および主体部の把握を目的としてB～Eトレンチを設定した。さらに前方部外側隅角（コーナー部）の確定のためにFトレンチを設定した。その結果、B～Dトレンチにおいて周溝は確認できなかった。9～11トレンチの様相とも合わせ、当該部ではすでに周溝は完全に削平されたものと考えられる。この結果は、昨年度に周溝であることに疑問を抱かざるを得なかった第2トレンチの溝についても、周溝である可能性は完全に否定されることになった。またEトレンチから主体部を検出することはできなかったものの、凝灰岩の破片が出土した。石室ないし石棺材の破片である可能性が考えられる。墳丘規模に比し

て高さが低いことから（側面では平坦面から後円部墳頂部まで2 m弱）、墳丘は周囲とともに上部も相当削平されたものと考えられる。ただし、凝灰岩の出土量は僅少であることから、石室ではなく石棺である可能性が高い。次に前方部外側の隅角部に設定したFトレンチでは、直角に近く墳丘に沿って大きく屈曲する落ち込みを検出した。落ち込みは9～11 トレンチで確認したものよりも相当に深い。これが9～11 トレンチの続きであればこれらは周溝であり本墳の規模も確定するが、当該部では樹根が複雑に絡み正確な数値を実測することはできなかったため、確定には至っていない。今後測量の結果、比較的旧状を残していると考えられる前方部正面側まで落ち込みが続いているのか否かについての確認を行う必要がある。

以上、1号墳は墳丘各所が相当に削平を受けていることが判明した。しかし、墳丘側面で認められた溝状遺構が周溝である可能性は高い。これが周溝であれば、墳丘の規模が確定するとともにくびれ部が括れない形態の周溝となる。第4年度（平成27年度）ではFトレンチの大きく屈曲する落ち込みの性格を明らかにして、周溝であることを確定することにしている。これによって墳丘の形態や規模が明確になるものと思われる。なお、詳細は後述するが各所において出土した埴輪は下総型埴輪<sup>(2)</sup>の可能性が高い。またEトレンチから出土した凝灰岩は石棺片である可能性が高い。下総型埴輪をはじめ、括れない形態の周溝や凝灰岩の石棺等、いずれも6世紀後半～末頃の年代観を示すものとみて矛盾しないものである。

## 2・3号墳

1号墳同様第1年度（平成24年度）は、平板による実測調査を行った。2・3号墳はいずれも墳頂部から裾部に向けて急峻な崖状になった部分があり、墳丘裾部の一部が相当に削平されていることが予測された。特に3号墳の西南側は相当規模の削平が行われたものとみられる。測量の結果、現状での規模は、2号墳は直径約13m、3号墳は南北約9m、東西約11mであった。こうしたことにかんがみ、次年度以降は本来の墳丘規模を復元・確定することを第1の目標に発掘を行うことになったが、まずは本古墳群の中心古墳である第1号墳の墳丘規模確定や主体部の様相等、具体相を明らかにすることを先決課題としたため、第2年度（平成25年度）は2号墳の東南側、つまり

1号墳側にトレンチ1本（第1トレンチ）を設定したにとどまる。本トレンチでは墳丘からみて外方端部で周溝の可能性のある落ち込みを検出したが、外方の立ち上がりを検出することができなかった。これをうけて、次年度では、この落ち込みが周溝であるか否かの確定を行うため、墳丘をはさんで反対側にトレンチを設定することになった。

第3年度（平成26年度）は、以上の経緯を受けて周溝の有無をはじめ両古墳の規模確定を目標として2号墳の北西裾部（Aトレンチ）、および3号墳の南東裾部（Gトレンチ）にトレンチを設定した。調査の結果、3号墳に設定したGトレンチにおいて明瞭な周溝（幅約2m、深さ0.6m）を確認した。この周溝の内側、つまり墳丘側の落ち込みは現状の墳丘裾部よりも外側に2m程度遊離した箇所から始まっている。このため当初の墳丘規模は、現状で示されたものよりも大きくなる可能性が高い。しかし、南東部1ヶ所で確認したに過ぎないため、次年度には少なくとも反対側（北西部）にトレンチを設定して周溝である確証とともに、当初の墳丘規模確定を得る必要がある。これに対して2号墳に設定したAトレンチでは最西部、すなわち外端部において南北に走る溝を検出したが、第2年度に検出した落ち込みと同一の周溝とするには角度等に相当な違和感があり、第2年度検出の落ち込みと合わせいずれも周溝と断じるには程遠い状況であると言わざるを得ない。このため次年度には、周溝の有無を含め確認を目的としたトレンチ調査を行う予定である。いずれにしても両古墳とも埴輪が認められないことから、当該地における埴輪終焉期、6世紀末ないし7世紀初頭以後の構築にかかるものとみて相違ないであろう。

### その他

3ヶ年にわたる測量及び発掘調査の過程で、その都度調査団は綿密な踏査を実施している。つまり地表面の微妙な高まりや横穴墓の痕跡等、微細な変化にも極力注意を払って分布調査を実施してきた。こうした踏査の結果、主尾根から派生して降下する舌状の支尾根において地膨状の起伏3箇所を確認した。このうち1箇所では、第2年度の際、雨水によって現われた須恵器の破片（大甕）数個がかたまった状態で確認された。そこで出土状況の略測を実施したうえで須恵器を取り上げた。須恵器の示す年代はおおよそ7世紀代

(内面の青海波文をすり消したもの)と思われる。この結果、地膨状の高まりの中には終末期古墳後期ないしは古墳に続く時期の墳墓が含まれている可能性が高いものと想定される。今後これらについても、その性格を明らかにしていく必要がある。また、主尾根の南西側傾斜面において(2号墳の南西側)横穴墓の奥壁部がかろうじて残存している状況を確認した。現状では1基のみの確認に過ぎないが、当該地周辺の状況を勘案すれば、築造時期はおおむね7世紀後半から8世紀に至り、おそらく本来は群をなしていたものと思われる。

以上に述べた地膨状の起伏(終末期の小墳墓)及び横穴墓の存在を勘案すれば、蟹ヶ谷古墳群は6世紀後半から8世紀に至るまでおよそ150年近く奥津城としての機能を有していた墳墓地であった可能性が高いものと思料される。

### 3 蟹ヶ谷古墳群の歴史的意義

本古墳群の歴史的意義を論じるためには西北約2kmに位置する橘樹郡衙、および郡寺としての性格が付与される<sup>ようこうじ</sup>影向寺<sup>(3)</sup>との関係に留意する必要があるが、そのためにも周辺の古墳を含む史的展開の中で位置づけることが重要である。

そもそも武蔵国府が埼玉古墳群の所在する北武蔵ではなく多摩川流域、つまり南武蔵に設置されたことが問題となる。当該地、特に多摩川左岸地域では4世紀前半の宝葉山古墳(前方後円墳・墳丘長98m)以後、亀甲山古墳(前方後円墳・107m)→野毛大塚古墳(帆立貝古墳・82m)と大型古墳の築造が相次いだ。しかし、5世紀初頭に築造された野毛大塚古墳以後、大型古墳の築造は久しくなかった<sup>(4)</sup>。ところが7世紀になると、切石石室を内蔵する方墳をはじめ八角形古墳の可能性のあるものや上円下方墳など、顕著な古墳の築造が相次ぐ<sup>(5)</sup>。このうちの大半は多摩川左岸に所在するが、蟹ヶ谷古墳群が位置する右岸においても馬絹古墳<sup>(6)</sup>が所在する。しかし突如出現したように思われる多摩川流域の終末期古墳であるが、これらの内部主体たる横穴式石室の構造は、北武蔵のそれに近似することが注目される。そこで、

以下では当該地（多摩川左岸）における終末期古墳の代表的事例を概観しておこう。

当該地においては7世紀代に入り、いわゆる首長墓としての「切石石室」が連綿と構築される（ただし、群馬県総社古墳群のように同一地域に連続して構築されるのではなく、多摩川左岸中流域の各所において散在的に構築されている。なお、多摩市の稲荷塚古墳、臼井塚古墳のみ連続して構築されていることが他と異なっている）。まず八王子市に北大谷古墳が構築される。本石室は後述する多摩川右岸の馬絹古墳同様三室からなるが、これは府中市の熊野神社古墳に引き継がれる。ただし両古墳ともに他の多摩川左岸における首長墓同様平面胴張り形を呈しているところが馬絹古墳と異なっている。この三室石室は、三鷹市の天文台構内古墳の構築をもって終焉する。なお、熊野神社古墳および天文台構内古墳は上円下方墳であることが特筆される。これに対して二室石室には、多摩市の稲荷塚古墳、臼井塚古墳がある。両古墳は他と異なり至近の距離にある。したがって同一系譜の被葬者が想定される。特に稲荷塚古墳は八角形を呈する可能性があり、畿内における八角形古墳との関係性が気になるが、八角形古墳であったとしてもおそらく畿内において大王墓固有の墳形に定まる直前、つまり7世紀前半に比定できるのではないだろうか。以上の古墳は、おおむね北大谷古墳および稲荷塚古墳が7世紀前半～中葉、熊野神社古墳、臼井塚古墳が7世紀中葉～後半、天文台構内古墳が7世紀後半～末に比定できる。また以上の石室が示す胴張・切石石室、中でも三室構成の石室は、北武蔵・比企・埼玉地方の石室に通じるものがあり、7世紀になって急速に顕著な古墳が構築されるようになった多摩川流域の情勢とも合わせて、北武蔵の勢力の一部が当該地に移動したとする説も提示されている。ただし壁面の構成には北武蔵との間に相当な相違があることに留意しなければならない。また稲荷塚古墳と臼井塚古墳を除き、いずれも所在地が相当に離れていることなど系譜が数系列ある可能性も考えられることから、今後も引き続き検討を加える必要があろう。なお上述した古墳のうち、特に墳形について言及しなかった古墳はいずれも円墳である。

次に多摩川右岸に目を転ずると、馬絹古墳の存在が特記される。馬絹古墳は宮前区馬絹に所在する二段築造の円墳（直径33m。ただし、上円下方墳の

可能性がある)で、橘樹郡衙や影向寺の西方2km弱に所在する。盗掘によって既に副葬品が持ち去られており、築造年代を詳細に比定することは難しいが、奥室、中室、前室の3室からなる横穴式石室や墳丘に見られる版築構造などから7世紀後半の年代が想定されている。したがって橘樹郡衙や影向寺の創建期と同時並行あるいは直前の段階に比定できる。横穴式石室は泥岩を用いた切石切組積で、目地には白色粘土を塗布するほか、奥からみて右側壁には円文、奥壁中央の鏡石にも詳細不明ながら文様が赤色塗彩されている。本石室は多摩川左岸の終末期古墳同様切石切組積石室で複室構造であるが、平面が胴張形を示さない形態であることなど、若干の相違も認められる。

ところで橘樹郡衙や影向寺の北西には末長・久本古墳群<sup>(7)</sup>が所在する。本古墳群は、橘樹郡衙および影向寺と蟹ヶ谷古墳群の位置関係を反転させた位置に相当する。これらの古墳は削平が進んでおり墳形等詳細は不明であるが、すべての古墳から埴輪が出土しており6世紀前半から後半にかけて構築された古墳群であることがわかる。したがって本古墳群が形成を終えた後、あるいはその終焉段階に蟹ヶ谷古墳群の形成が始まったものと考えられる。また横穴墓も伴っており、蟹ヶ谷古墳群と群構成が類似している。さらに古墳群形成の初現期に前方後円墳を構築することも同様であるが、この点については左岸の多摩川台古墳群をはじめ周辺の古墳群の多くに同様の現象が指摘できそうである。前方後円墳を一族結集の要としての始祖墓としての性格が付与されたものと考えられる<sup>(8)</sup>が、多くの事例では前方後円墳が継続せず1基限りで終焉を迎える。このことについては、7世紀には汎列島の前方後円墳の築造が停止することと密接な関連があるものと思われる。

以上のように見るならば、蟹ヶ谷古墳群は末長・久本古墳群と馬絹古墳の中間期に構築され、郡衙創設と密接な関係を持ちやがて郡衙に勤務した在地豪族の奥津城と考えてよいであろう。しかし、1号墳→2・3号墳→終末後期の小墳墓及び横穴墓のうち、特に後半段階の小墳墓と馬絹古墳との関係、さらには末長・久本古墳群の被葬者と蟹ヶ谷古墳群の被葬者との関係など、追究すべき課題は多い。調査は継続しており、これらすべては今後の課題である。

なお、小稿掲載の図、写真は高久健二氏が作成した。



## 註

- (1) 柴田常恵・森貞成『日吉加瀬古墳』三田史学会 1953 年。
- (2) 下総型埴輪とは轟俊次郎によって規定された以下の共通する特徴を持つ埴輪の一群で、下総地方を中心に分布する（下総型埴輪の特徴の概要は、次の犬木論文による。犬木努「下総型埴輪基礎考—埴輪同工品論序説—」『埴輪研究会誌』第 1 号）埴輪研究会 1995 年。① 3 段突帯、4 段構成である。② 第 2・第 3 段に比べて第 1 段の幅が狭い。③ 底径が小さく、細長いプロポーションをもち、「底径：口径：器高」の比率がほぼ 1：2：4 である。④ 突帯の下側のナデつけが不十分で突出度が低い。⑤ 基部から口縁部まで乾燥期間をおかずに一気に積み上げて成形する。⑥ 縦長の透穴を穿ち、穿孔後、透穴面の指ナデ調整を行う。轟俊次郎『埴輪研究』第 1 冊 轟俊二郎 1973 年。
- (3) 影向寺文化財調査委員会（代表・伊東秀吉）編『川崎市高津区野川影向寺文化財総合調査報告書』川崎市教育委員会 1981 年、戸田哲也・服部隆博・河合英夫・西野吉郎・坪田弘子・麻生順司『武蔵国橘樹郡衙推定地 千年伊勢台遺跡—第 1～8 次発掘調査報告書—』川崎市教育委員会 2005 年、服部隆博・栗田一生『神奈川県川崎市—橘樹郡衙跡・影向寺遺跡総括報告書〔古代編〕—』川崎市教育委員会 2014 年。
- (4) 後の武蔵国の領域中で、代表的首長墓（大型古墳）の築造地が多摩川流域など南武蔵から埼玉古墳群に代表される北武蔵へ移動する現象に注目して、これを『日本書紀』の安閑紀に記載された「武蔵国造の乱」と関連させた甘粕健の論考が有名である。これは国造就任を争った同族内の争いに大和王権と上毛野の豪族が加勢した結果、王権と結びついた笠原直使主が勝利し、敵対した（上毛野氏と組んだ）小杵が誅殺されたとする記事を、南武蔵の豪族から北武蔵へと主導権が移ったことを反映した記事であるとする論考である。考古資料から具体的な歴史史料に記載された事件と照合した論考として注目された。しかし、その後の調査結果は、多摩川流域で大型古墳の築造が終焉するのは 5 世紀前半であることを示している一方、埼玉古墳群は 5 世紀後半

の稲荷山古墳を嚆矢としており、両方で時期が異なるとともに6世紀前半に比定される安閑紀とは双方ともに差異がある。このため、埼玉県比企地方の勢力と埼玉古墳群を構築した勢力との騒乱であると考え、いづれにしても甘粕説が成立しないことは明らかである。甘粕健「武蔵国造の反乱」『古代の日本7 関東』角川書店 1970年。

- (5) 土生田純之・泊美由紀「研究史・多摩川中流域における終末期横穴式石室の様相—複室胴張り石室を中心に—」『専修考古学』14号 2012年。
- (6) 樋口清之・金子皎彦「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財調査集録 第8集』川崎市教育委員会 1973年、金子皎彦・竹石健二他『馬絹古墳 保存整備・活用事業報告書』川崎市教育委員会 1994年他。
- (7) 濱田晋介「川崎の埴輪」『川崎市市民ミュージアム紀要』第4集 1991年
- (8) 土生田純之「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集 九州古文化研究会 2010年。

## 図参考文献

- 新井悟ほか「高津区蟹ヶ谷古墳群測量調査報告」『川崎市市民ミュージアム紀要』第26集 2014年
- 新井悟「蟹ヶ谷古墳群の発掘調査」2015年11月3日、川崎市市民ミュージアムで開催された講演会の参考資料
- 村田文夫『川崎・たちばなの古代史—寺院・郡衙・古墳から探る』有隣新書 2010年





図 2. 蟹ヶ谷古墳群全体図〔新井ほか 2014〕

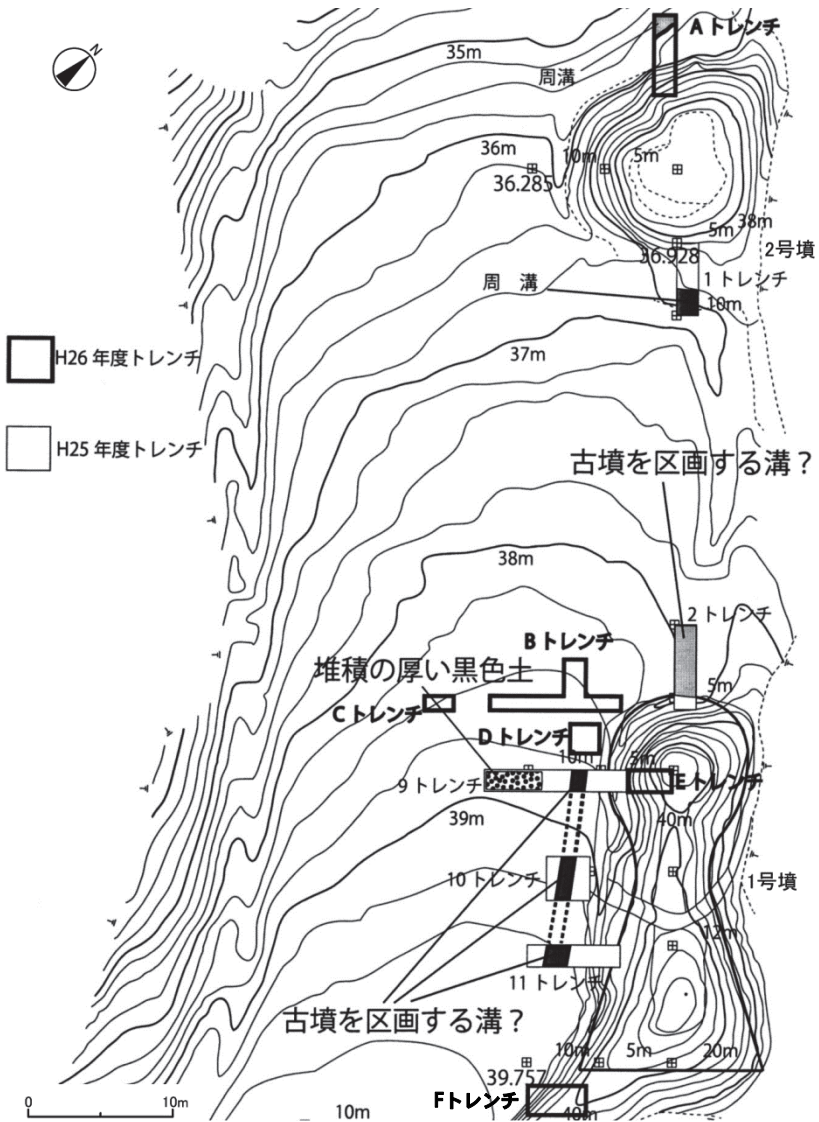


図 3. 蟹ヶ谷古墳群 1・2 号墳遺構配置図〔新井 2015〕

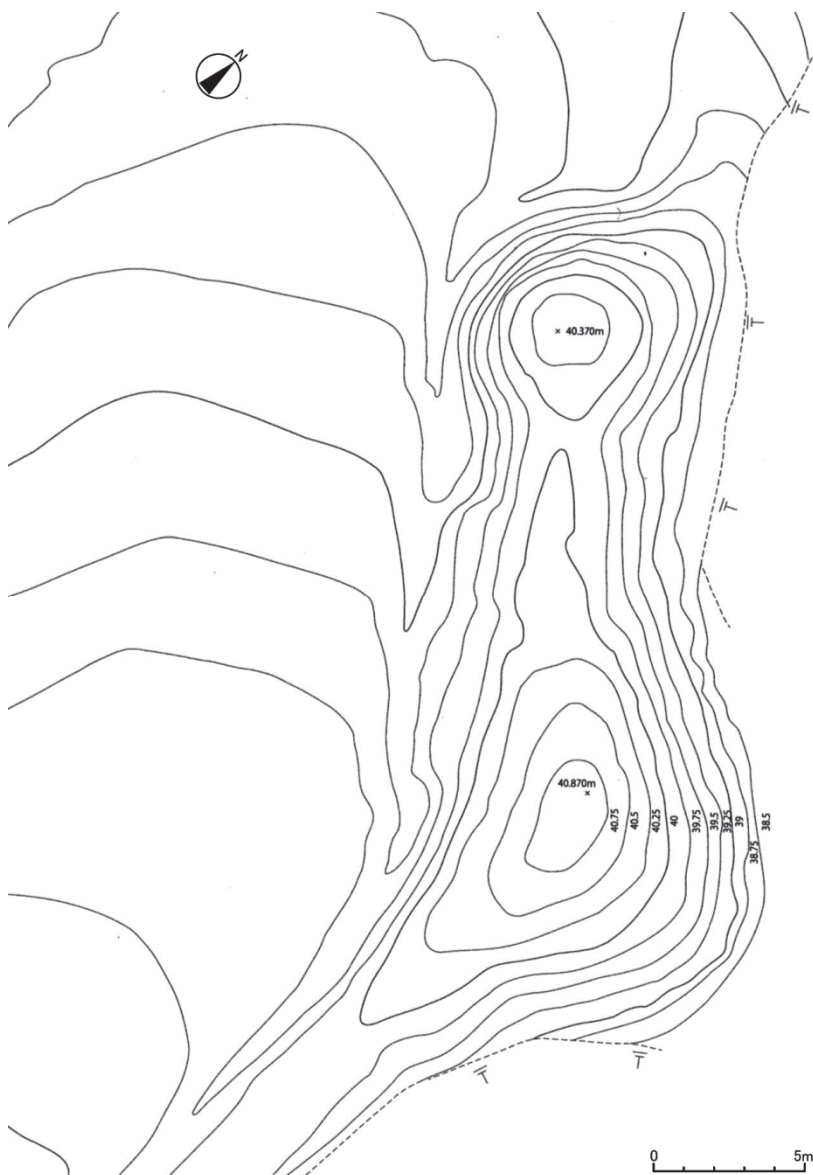


図 4. 蟹ヶ谷古墳群 1 号墳墳丘測量図〔新井ほか 2014〕

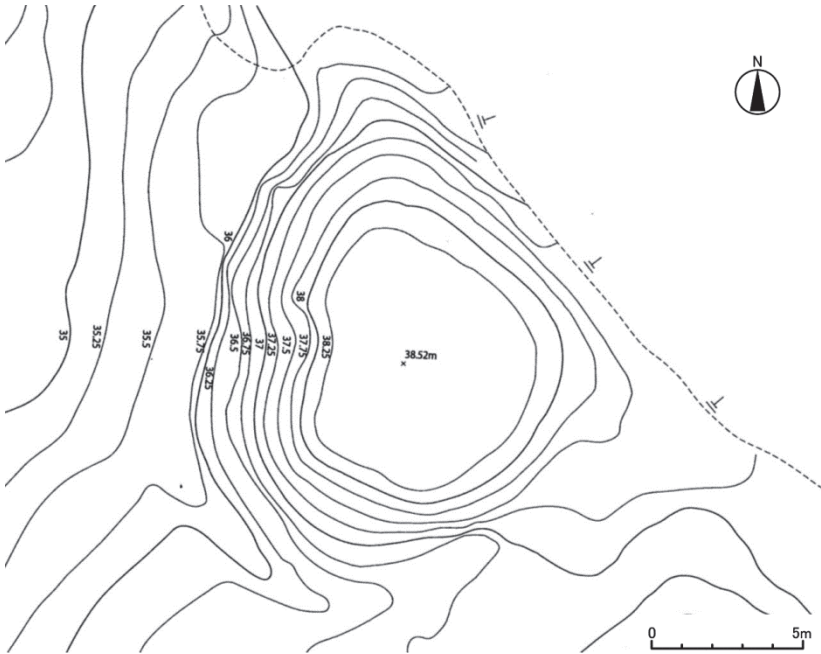


図 5. 蟹ヶ谷古墳群 2 号墳丘測量図〔新井ほか 2014〕



図 6. 蟹ヶ谷古墳群 3 号墳丘測量図〔新井ほか 2014〕





写真 1. 蟹ヶ谷古墳群 1 号墳墳丘



写真 2. 蟹ヶ谷古墳群 1 号墳墳丘上部





写真 3. 蟹ヶ谷古墳群 1 号墳 10・11 トレンチ



写真 4. 蟹ヶ谷古墳群 1 号墳 E トレンチ



写真 5. 蟹ヶ谷古墳群 2 号墳墳丘



写真 6. 蟹ヶ谷古墳群 2 号墳 A トレンチ





写真 7. 蟹ヶ谷古墳群 3 号墳墳丘



写真 8. 蟹ヶ谷古墳群 3 号墳 26-1 トレンチ



写真 9. 蟹ヶ谷古墳群発掘作業



写真 10. 蟹ヶ谷古墳群現場説明会（2013 年 3 月 16 日）